

豺^{さい}（中国語発音は chái）は本作品中ではアカオオカミ（赤狼）のことを指している。アカオオカミはドールとも呼ばれる哺乳綱ネコ目（食肉目）イヌ科の動物で、ロシアのアムール地方、朝鮮半島、アルタイ山脈、インド、スマトラ島、ジャワ島に分布している。体長は80cm から 113cm、体重は 10kg から 20kg で肩高は 40cm から 50cm。山地の森林に 6 頭から 8 頭、ときに 20 頭ほどの群れをつくって住んでいる。

火 豺

沈石溪

（訳 横田勤・萩田麗子）

私とボノンディンはそれぞれ柴を担いで、夕陽に照らされた山道を踏みながら山の林から村へと戻っていた。曲がりくねった山道の一つを回り抜けたとき、ボノンディンが突然止まれの合図を送り、向こうに見える谷間の雑草地を指さしながら言った。「見ろよ、赤狼の群れだ!」

彼が指さすほうを見ると、見事な赤毛の赤狼の群れが歩いていた。赤狼は家族を生活単位として行動する動物で、目の前のその群れは、大人が三頭、子供が五、六頭という三家族で構成されているのだということがはっきりと見てとれた。六頭の大人は協力して一頭の子ウシを引きずっている。十五、六頭の子供は自分の両親を取り囲み、興奮して跳んだり走ったりしている。この三家族はいっしょになってその不運な子ウシを仕留めたいらしい。これから静かな所を探して豪華な晩餐会を楽しもうとしているところなのだろう。

思った通り、六頭の大人が子ウシを崖下の洞窟の中に引っぱっていった。「おい、俺たちや金持ちになれるぞ！」ボノンディンは縦横にしわがある顔をほころばせながら言った。「はやく付いて来い！」

私は柴を担いだまま、何が何だか分からずに彼の後に付いて走り、やがて洞窟に近づいた。

走りながら、私の心臓はドキドキと激しい鼓動を打っていた。彼が私といっしょに赤狼の群れと戦うつもりではないかと思っていたからだ。それはとんでもなく危険な取りひきだ。赤狼は狂暴な性格で、とりわけ群れを成した赤狼は^{ひょう}豹でさえ襲って餌食にすることがある。私と彼は柴を刈るために山に来たのだから、猟銃も持っていなかったし弓もなかった。二本の柴刈り刀だけで六頭の大人、十五、六頭の子供の赤狼をまともに相手にしたら、あの子ウシと同じ運命になるのは目に見えていた。

「まずあいつらを洞窟に閉じ込めよう。それから村に行って人を呼んで来る。おれは洞窟に入ったことがあるんだ。ひょうたん型をしていて、入り口は小さいけど中はけっこう広い。あの入り口のほかに出入り口はない」

ボノンディンは私を洞窟から30メートルばかり離れたところにある^{かや}茅の茂みに連れていき、小さな声で言った。

「まず赤狼の群れを洞窟に閉じ込める、ってのはいい考えだ」と、私はあまりいい顔をしないで行った。「先ず洞窟に扉を付け、それから大きな鍵を買いに行ってガチャリと鍵をかける」

「おい、お若いの。そんなに皮肉っぽい尖った話し方はするなよ。おれがいつ洞窟に木の扉を付けるって言った？ 火の扉を付けるんだ、そう、火で鍵をする」

ボノンディンはそう言いながら、袋の中から携帯用の丸めた^{ほくち}火口（発火させた火を移しとるもの。茅の花穂に火薬を加えたものや麻などの茎を炭にしたものなどが用いられる。）のかたまりを取り出し、私に枯れ草を拾ってこさせ、そつと洞窟の入り口付近に這っていきそれらを撒いた。赤狼たちは洞窟の奥でごちそうを食べるのに夢中で、私たちが入り口付近でやっていることにはまったく気付いていない。太陽が沈み鳥の群れは巣に戻り、夕闇がずっしりと重くなったとき、私たちは洞窟の入り口に枯れ草を厚く敷き詰めていた。ボノンディンがマッチで火口に火を付けると、一瞬のうちに大きな炎になって燃え上がった。洞窟の中にいた赤狼たちは夢から覚めたように、ウオーンウオーンと吠え立てた。逃げようとして洞窟の入り口に

集まってきたが、灼熱の炎の熱に押し返され中へ引っ込んだ。野生動物が最も恐れるのは火だ。赤狼にとって火の扉は鉄の扉よりはるかに恐ろしいものなのだ。

この火の扉は、扉としてはふさわしい場所に取り付けられていた。洞窟は岩のあいだにある細い溝の奥にあり、この洞窟を出ると両側には絶壁が切り立っている。溝の幅は約1メートル、長さは5メートルほどで、そこを歩いてやっと広々としたところに出るのだ。赤狼がどれほど利口であっても、このような状況の中で火から逃げることは不可能であろう。5メートルの長さの火の帯なのだ。赤狼の跳躍力がどれほど素晴らしいといっても、舞台上で演技する犬が火の輪をくぐり抜けるように、跳びはねて行ってしまふなどあり得ぬことだ。その上洞窟の入り口は狭いから、彼らが助走して遠くへ跳ぼうとしても、頭を入りにぶつけて脳みそが裂けて飛び散るのは必至だ。ああ悲しきかな。

私とボノンディンには担いできた二抱えの柴がある。けっこうな時間燃やしてられる。ボノンディンは洞窟の外にある高さ一丈(3.3メートル)ほどの険しい崖の上にうずくまり、ゆっくりと下の火の帯に柴を投げ落としながら残念そうに言った。「もし風向きが良ければ、村に戻って人を呼んで来なくていいんだがな。煙が中に入っていけば^{いぶ}燻すか中毒死させることができるのに」

残念なことに、吹いていたのは東南の風で、彼らを窒息させたかもしれない濃い煙はすべて洞窟の左側へ吹いて行っていた。

ボノンディンが言った。「お前、ここで見張ってくれ。火を消さないように注意してろよ。おれは人を呼んで来る。遅くとも半時間で帰って来る」

「大丈夫だ」と私は胸を叩きながら言った。洞窟の入り口に向かって柴をちよっと投げる、そんな仕事は気楽で遊んでいるようなものだ。雨が降らず乾燥していて、神さまが大雨を降らしでもしない限り、この火を消すのは絶対に不可能だ。

空にはたくさんの星がキラキラと光っていて一筋の雲も見えない。雨の降る^{きざし}兆はまったくない。

ボノンディンが行ってから二十分ほど経つと、洞窟の中から赤子の泣き声に似た赤狼たちの泣き叫ぶ声が聞こえてきてぞっと身震いした。私は懸命に柴を追加した。幅1メートル、長さ5メートルのその火の帯の炎の高さは1メートルで、目もくらむほど美しい絨毯のようである。数分後、こんどは谷の外から犬の鳴き声が聞こえてきた。ああ、ボノンディンが猟師たちと猟犬を連れてやってきている。洞窟の中の赤狼たちはこれで一巻の終わりだ。

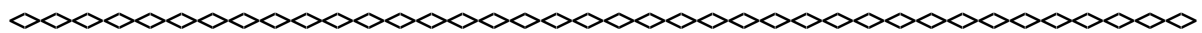
だがまさにこの時、私にとって一生忘れることのできないできごとが目の前で起こった。腹に二列の乳房をぶら下げた母狼が一頭、突然洞窟の入り口から足を踏み出してきたのだ。明るい火の光の中で、私にははっきりと見えた。炎は鎌の^{かま}ように、その赤狼のひげと顔の毛をさっと刈り取ってしまった。赤毛と白毛が互い違いに生えていた美しい赤狼の顔は、焼けて醜い黒い顔となった。赤狼は苦痛に顔をゆがめ鋭く一声吠え、狂ったように炎に向かって突っ込んでいった。そして火の帯の上をよろめきながら前進した。全身が火の玉になった。赤狼にこれほどの意志の力があるとは思ってもみなかった。1メートルの高さまで燃え上がっている炎の中を5メートルも進みつづけ、火の帯の外れに到達すると、ここでやっと四肢を止め、地面に倒れ伏した。その身体が火の帯の一部を覆って火を消した。続いて雄の赤狼が一頭同様にしながら進み、先の赤狼の身体の後ろで倒れた。六頭の大人の赤狼がドミノ倒しのようにして、一頭ずつつながって火の帯の上に倒れた。5メートルの火の帯の火が、六頭の赤狼の死体で消された。鍵が掛けられていた火の扉が、恐れを知らぬこれらの命によって開けられたのだ。

そしてこの時、中くらいの大きさの子供たちが洞窟から一つながりになって飛び出してきた。彼らは両親の体を、命を敷き詰めてできたその道を踏みながら、深い夜の森の中に消えていった。

蛾は自ら火の中に飛んで入るものだというが、自分を犠牲にして子供を救ったこの六頭の赤狼の行為を目の当たりにして、私はただ驚愕し呆然とし、どうしたらいいのかわからなかった。私が我に返ったとき時には、十五、六頭の子供の赤狼は影も形もなかった。

ボノンディンが猟師と猟犬をつれて駆けつけてきたとき、先頭に立って火の帯に入って行った母狼はとっくに火で焼かれて炭化していた。だが、それは半透明の真っ赤な火の塊となり、周囲でゆらゆらと燃えている小さな炎の中に在って、まるで生きているように見えた。それは夢幻の中の「火豺」であった！

(『中国微型小説排行榜(2012)』百花洲文芸出版社，南昌市，2013，pp. 30-32.)



(中国語原文) 火 豺 沈石溪

我和波农丁每人挑着一担柴，踏着夕阳从山林回寨子。转过一道山湾，波农丁突然用手势示意我停下，指着山谷对面的一片荒草地说：“快看，一大群豺！”

我顺着他的手指望去，果然，一群毛色艳红的豺在小路上走着。豺是一种以家庭为单位生活的动物，显然，这是由三家豺组合起来的群体，因为整群豺分为三个小部分，每个部分都是两只大豺和五六只小豺。六只大豺齐心协力地拖拽着一头牛犊，十五六只小豺围着自己的父母兴奋地跳跃奔跑。看来，这三家豺联手猎获了那头倒霉的牛犊，正要找清静的地方享用丰盛的晚宴呢。

果然，六只大豺把牛犊拖进石崖下的一个山洞里去了。

“哎呀，我们要发财啦！”波农丁一张皱褶纵横的老脸笑成了一朵花，说，“快，跟我来。”

我挑着柴，稀里糊涂地跟在他后头一路小跑，迅速接近了那个山洞。

我一面跑一面心里打着小鼓，我以为他要带我去和豺群搏杀，那可是小命悬在刀尖的买卖。豺生性凶猛，尤其是纠集成群的豺，敢与豹子争食。

我和他是上山来砍柴的，既没带猎枪，也没带弩箭。光凭两把柴刀，要和六只大豺和十五只半大的小豺玩真的，下场恐怕跟那头牛犊差不多。

“我们先把豺群锁在山洞里，然后到寨子里叫人。唔，我进过这个山洞，形状像葫芦，洞口小，里头很宽敞。但这是个死洞，没有第二个出口。”波农丁把我带到离洞口30多米远的一丛茅草里，小声对我说。

“先把豺群锁在山洞里，这主意挺不赖。”我没好气地说，“我们先给山洞安一扇门，然后去买一把大铁锁，‘咔嚓’一声把大门给锁上。”

“年轻人，说话别那么刻薄。我啥时候说过要给山洞装木门啦？我是说给山洞安一道火门，唔，用火来锁。”

波农丁说着，从筒帕里掏出一大团随身携带的火绒，又让我捡了许多枯草，爬过去轻轻地撒在山洞口。那群豺大概是在洞底聚餐，大概是吃得太高兴，太忘乎所以，竟然一点儿也没发觉我们在洞口所做的一切。太阳落山了，群鸟归巢，暮色沉沉，我们在洞口铺起了厚厚一层枯草。波农丁用火柴点燃了火绒，霎时，燃起了一片大火。洞里的豺们这才如梦初醒，嗷嗷怪啸着，

挤到洞口想夺路逃命，又被炽热的火焰烫得缩回洞底。野兽最怕的就是火，对豺而言，火门比铁门还要厉害。

这火门安得可真是地方。这个山洞坐落在一条小石沟的底端，换句话说，一出洞口，两边就是绝壁。石沟约有1米宽，5米来长，然后才是空旷的山野。豺再狡猾，也不可能在这样的环境里绕开火焰逃走；5米长的火带，豺的弹跳力再棒，也休想象舞台上表演的狗钻火圈那样嗖地蹿跃过去；再说，洞口狭窄，它们若想助跑跳远，必然会一头撞在洞顶的石壁上，脑浆迸裂，呜呼哀哉。

我和波农丁挑着两大担柴，足够烧一阵子了。波农丁蹲在洞外一丈多高的陡坎上，一面慢悠悠地往底下的火带扔柴火，一面遗憾地说：“要是风向对头，不用回寨子叫人，浓烟灌进洞去，熏也要熏死这些豺！”

可惜刮的是东南风，让会窒息生命的浓烟都刮到山洞的左侧去了。“你守在这里，注意别让火熄灭。我去寨子叫人，最多半个小时就回来。”波农丁说。

“没问题。”我拍着胸脯说。往洞口前扔扔柴火，这活儿轻松得就像玩儿似的。天旱物燥，除非老天爷立刻下场暴雨，否则这火焰绝对不可能熄灭的。

天空繁星闪烁，不见一丝云彩，没有任何要下雨的征兆。

波农丁去了二十来分钟，我听见洞里传来一声声如婴儿啼哭般的豺的哀号，令人毛骨悚然。我拼命添柴火，那条1米宽5米长的火带火苗有1米高，像一条鲜艳夺目的地毯。又过了几分钟，山谷外传来狗的吠叫声。哦，波农丁带着猎人们和猎狗群快赶到了，山洞里的这群豺，很快就要成为瓮中之鳖了。

就在这时，发生了一件让我这辈子永难忘怀的事；一只腹部吊着两排乳房的成年母豺突然跨出洞口。明亮的火光中，我看得十分清楚。火舌像把推剪，一下子把它的胡须和脸上的毛“剪”光了，红白相间的漂亮的豺脸被烧得一片黑，成了一张丑陋的黑脸。它龇牙咧嘴地怪啸一声，疯狂地扑向火焰。它在火带上趑趄趑趄地向前迈进，整个身体变成了一只火球。天晓得它怎么会有这么大的毅力，竟然在一米高的火焰中坚持走完了5米长的路程，一直走到火带尽头，这才四肢趴下，匍匐倒地。它的身体盖熄了一段火带。紧接着，一只成年公豺又重蹈覆辙，倒在前面那只母豺的身后。六只大豺，就像多米诺骨牌那样，一个接一个倒在火带上。5米长的火带被六只大豺的尸体

压熄了，那上了锁的火门被无畏的生命撞开了。

这时，半大的小豺们从山洞里鱼贯蹿出，踏着它们父母的身体，踏着用生命铺出来的通道，越过石沟，越过死亡，逃进了浓浓黑夜莽莽密林。

飞蛾扑火，牺牲自己，拯救后代，六只大豺这种惊天地泣鬼神的壮举看得我目瞪口呆、不知所措。等我从震惊中清醒过来，十五六只小豺已逃得无影无踪。

波农丁带着猎人和猎狗赶到时，带头走进火带的那只母豺早已被火烧成焦炭，又由焦炭变成红彤彤半透明的火堆，在四周跳动的火苗的映衬下，栩栩如生，像一只梦幻中的火豺！

